

がん診療レジデントマニュアル（第5版）

高野利実

虎の門病院臨床腫瘍科部長

『がん診療レジデントマニュアル』は、オンコロジストのバイブルである——。

なんていうのは間違いである。本書がバイブルであってはならない。でも、オンコロジストをめざす若手医師が、何か1冊、白衣のポケットに入れておくとすれば、本書であろう。

バイブルではないが、役に立つ。役に立つが、書いてあることをただ信じてしまうのは、本書の正しい読み方ではない。

バイブルは書かれてから何千年経とうとも、信じる人にとっての「絶対的真理」を常に示してくれるが、医学書はどんなに権威があろうとも、活字になった時点ですでに「過去の情報」である。それは、新しいエビデンスが日々標準治療を書き換えていく EBM の時代にあってはやむを得ない。そもそも最先端の最高レベルのエビデンスであっても、「現時点での相対的な事実」にすぎないのであって、「絶対的真理」はどこにもない。

それでも、オンコロジストは持っている限りの力を尽くして、がん患者に向き合わなければならない。次々と生じる「臨床上の疑問」に直面しな

がらも、迷える患者の道案内役となり、チーム医療のかじ取り役とならなければならない。そんなオンコロジストの強い味方が、本書である。簡単な疑問であれば、本書で当座の答えが見つかるかもしれない。ただ、そのためだけに本書を持ち歩くのは、肩こりが悪化するリスクも考慮すれば推奨できない。本書の真の存在意義は、活字の裏にある著者（国立がん研究センターの内科レジデント）たちの想いや迷い、あるいはこの本をきっかけに広がる EBM の世界にあると、私は思っている。

本書では、治療法の信頼度を★の数（1～3 個）で示しているが、この★の付け方や、説明文のニュアンスには、著者たちの想いや迷いが読み取れる。★にこめられた重さが伝わってくるというのは、星の重さが年々軽くなっていると言われる「ミシュランガイド」とは大きく違う点である。若手医師の皆さんには、同世代のレジデントたちが、日々の疑問と向き合い、エビデンスと格闘しながら書き上げた本書のページをめぐって、そこから疑問解決の糸口を見つけていただきたい。疑問は解決しないことのほうが多いし、本書だ

けで疑問が解決してしまったような場合は、その答えを疑ったほうが良いかもしれない。むしろ大事なのは、本書のページの裏側にある広大な「エビデンス」の海に自ら飛び込むことであろう。エビデンスが十分でなくても意思決定はしなければならないが、そんなときにこそ、本書で読み取れる「迷い」が役に立つ。

本書は 1997 年に第 1 版が刊行されて以降、レジデントが執筆するという伝統を守りながら、3 年ごとに改訂を繰り返し、第 5 版となった。実際に執筆したレジデントに聞くと、「研修の集大成としてこれ以上ない貴重な経験ができた」という声もあった。最先端の情報という点ではインターネットにかなわないし、今どき、紙媒体を持ち歩くこと自体が時代遅れなのかもしれないが、それでも、「レジデントの情熱」が詰まった本書は、（肩こりが悪化しようとも）白衣のポケットに入れておく価値がある。

●B6 変型/頁 504/2010 年/定価
4,200 円（本体 4,000 円＋税 5%）
[ISBN978-4-260-01018-4]
医学書院 刊